

タイにおけるパブリック・アーケオロジーの実践に向けて

——ドヴァラヴァティー遺跡の事例から——

平成 27 年入学
派遣先国：タイ王国
白石 華子

キーワード：パブリック・アーケオロジー、遺跡、文化遺産、ロッブリー、ドヴァラヴァティー

対象とする問題の概要

現在のタイ王国（以下、タイ）においてタイ族が支配を始めたのは 13 世紀のことであり、それ以前は他民族の支配下にあった。その一つが、6 世紀から 11 世紀にかけて現在のタイの中部を中心にモン族によって築かれたドヴァラヴァティー王国であり、今も国内各地に当時の遺跡が数多く残されている。しかし、現在人口の約 85% をタイ族が占めるタイ国民にとって、ドヴァラヴァティー遺跡とは、自らのルーツやアイデンティティを求める対象ではない。

それらの遺跡が、現代タイ社会において文化遺産として受容され、保存の対象になることはありえるだろうか。ここでいう「文化遺産」とは、「人々が過去に自分たちのアイデンティティを感じるための文化的媒体」であり、「次世代に受け継ぐもの」と定義する [田代 2002 ; 松田 2013]。こうした疑問に答えるため、また保存の具体的なあり方を検討するため、現代における「ドヴァラヴァティー」の意味や価値を考察していく。

研究目的

本研究の目的は、タイ中部のロッブリーに所在するドヴァラヴァティー遺跡を対象として、①現在および過去における当該遺跡のタイ国内での社会的位置づけ、②地域住民の当該遺跡に対する認識や歴史観、③発掘調査が社会や地域に及ぼす影響等を調査することによって、その遺跡の調査や保存、活用のあり方を検討することである。またここから、将来的なパブリック・アーケオロジーの実践に向けての基盤を構築したいと考えている。パブリック・アーケオロジーとは、「考古学と社会との関係を研究し、その成果に基づいて両者の関係を実践を通して改善する試み」 [岡村・松田 2012] であり、文化遺産の普遍的かつ絶対的であると考えられがちな価値に、疑問符を投げかけるものでもある。

フィールドワークから得られた知見について

今回の調査では、タイ国各地の博物館や遺跡を訪れる機会を得た。その中で得られた知見は、主に以下の通りである。

まず各国立博物館で共通して感じたことは、「王室」の影響力の強さである。タイは国民の王室に対する敬愛の深さで知られる国であり、博物館においても必ず、その設立や遺跡の発掘調査の経緯と王室との関わりについての言及がある。そこには純粋な王室への敬愛だけでなく、強い政治的意図が感じられた。

また、バンコク国立博物館の展示と地方に所在する国立博物館の展示とでは、その内容が異なる。バ

ンコク国立博物館では、各時代や美術様式ごとに展示室が設けられているが、その多くはタイ全土から集められたスコタイ時代以降の遺物、特に仏教関連遺物（主に仏像）である。しかし、地方の国立博物館では少し状況が異なる。例えば、ロッブリーのプラ・ナラーイラーチャニウェート博物館では、先史時代からアンコール時代までの幅広い遺物が、スコタイ時代以後のものと遜色なく、豊富に展示されている。それは、ロッブリーがドヴァラヴァティー時代に栄えた都市の一つであり、その後のアンコール時代にも

タイ国内の要所となったために、当時の遺跡が今も身近に存在することが要因と考えられる。

また、各遺跡で得た実感としては、ドヴァラヴァティー遺跡はアンコール時代以後の遺跡と比較すると観光資源化できるようなモニュメントを欠いており、現在から将来にかけて、地域への経済的恩恵を生み出さないという点で、同じタイ族以前の遺跡であるアンコール遺跡とは異なる事情を有する。

今後の展開・反省点

今回の渡航の目的は、主にタイ語学習、博物館や遺跡の見学、また博士予備論文に向けた調査地の決定であった。結果的に、調査地はロッブリー郊外の Phromthin Tai 遺跡となった。

今後は、2016 年 6 月から Silpakorn 大学考古学部 Thanik 准教授による Phromthin Tai 遺跡での発掘調査に参加する予定である。その際、先述の 3 点の研究目的に関して、文献調査及び聞き取り調査をおこなう。その成果をもとに、ドヴァラヴァティー遺跡を対象としたパブリック・アーケオロジーの実践にあたっての具体的な方策を検討したい。

今回の反省点としては、タイ語学習が当初の想定ほどは進まなかったことと、それゆえに具体的な聞き取り調査をおこなえなかったことが挙げられる。今後の調査のためにも、タイ語の早急な習得が必要である。



写真 1 プラ・ナラーイラーチャニウェート博物館



図 1 ロッブリーの位置



写真 2 Phromthin Tai 遺跡の発掘現場



写真 3 Phromthin Tai 遺跡におけるパブリック・アーケオロジーの実践例（ボランティアによる土器洗いの様子）

【参考文献】

田代亜紀子. 2002. 「東南アジアにおける文化遺産保存と国際協力」『奈良文化財研究所創立 60 周年記念論文集 文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所学報第 92 冊.

松田陽. 2013. 「パブリック・アーケオロジーの観点から見た考古学, 文化財, 文化遺産」『考古学研究』第 60 巻第 2 号.

松田陽・岡村勝行. 2012. 『入門パブリック・アーケオロジー』同成社.